

## 平成 26 年度島根県学力調査の概要及び分析について

浜田市教育委員会

平成 26 年度島根県学力調査について島根県及び浜田市の調査結果及び分析をお知らせします。  
今回の調査で測れるのは学力の一部であり、このことを踏まえて、単に数値のみで序列化された過度の競争につながるような留意をお願いします。

### 1 調査の概要

#### (1) 目的

学習指導要領における各教科の目標や内容に照らした学習の実現状況、及び、学習や生活に関する意識や実態を客観的に把握することをおして、島根県市町村立小・中学校における学習指導上の課題の改善状況を明らかにし、今後の教育施策の充実及び学校における指導の一層の改善に資する。

#### (2) 調査日 平成 26 年 4 月 24 日（木）、25 日（金）

#### (3) 実施対象学年及び実施教科等

小学校 3,4 年生〔国語・算数〕 小学校 5 年生〔国語・算数・理科・社会〕

小学校 6 年生〔理科・社会〕 中学校 1 年生〔国語・社会・理科・数学〕

中学校 2 年生〔国語・社会・理科・数学・英語〕

中学校 3 年生〔社会・理科・英語〕

※ 全対象学年に、「生活・学習意識に関する調査」を実施

#### (4) 用語説明

○「平均正答率」 各学年・教科において、児童生徒個人が正答した問題の割合（％）を県または市町村単位で平均した値。

○「目標値」 学習指導要領に示された内容について標準的な時間をかけて学んだ場合問題ごとに正答できることを期待した児童・生徒の割合を示したものの。

### 2 島根県全体の平均正答率

	国語	社会	算数・数学	理科	英語
小 3	72.7 (Δ3.5)	—	71.9 (Δ1.1)	—	—
小 4	65.4 (Δ2.4)	—	71.1 (Δ0.2)	—	—
小 5	68.2 ( 1.8)	69.7 ( 2.1)	60.6 (Δ0.6)	60.8 (Δ3.4)	—
小 6	—	66.3 ( 0)	—	68.2 (Δ3.2)	—
中 1	69.6 ( 3.8)	60.2 ( 4.0)	62.8 (Δ3.8)	59.4 (Δ1.4)	—
中 2	70.5 ( 3.8)	49.4 (Δ0.9)	58.7 ( 0.1)	56.1 ( 2.4)	64.1 ( 3.0)
中 3	—	51.1 (Δ1.0)	—	50.6 ( 1.0)	60.5 ( 2.5)

( ) 内は目標値との差。Δは県平均正答率が目標値より下回っている。

#### (1) 結果から分かること

・今年度 5 年ぶりに実施した小 3 の国語、算数について、いずれも正答率が目標値を下回っている。特に国語の「書く能力」や算数の活用問題に課題がみられる。

・国語については学年が進むにつれ、目標値との差が小さくなり、中学校に向けて改善している。算数・数学は全体として目標値との差は大きくないが、数量関係や図形に課題がある。

・理科は小学校で目標値を下回っている領域が多く、社会は中学校で目標値を下回っている領域が多い。また、英語は全体的に目標値を上回っている。

### 3 浜田市全体の平均正答率

	国語	社会	算数・数学	理科	英語
小3	74.4 ( 1.6) (Δ1.8)	—	73.7 ( 1.9) ( 0.7 )	—	—
小4	63.8 (Δ1.5) (Δ4.0)		71.4 ( 0.3) ( 0.5)	—	—
小5	68.0 (Δ0.1) ( 1.6)	69.2 (Δ0.5) ( 1.6)	65.8 (Δ0.2) (Δ0.8)	58.9 (Δ1.9) (Δ5.3)	—
小6	—	62.9 (Δ3.4) (Δ3.5)	—	67.1 (Δ1.1) (Δ4.3)	—
中1	67.2 (Δ2.5) ( 1.4)	57.8 (Δ2.4) ( 1.6)	63.4 ( 0.6) ( 0.4)	57.9 (Δ1.5) (Δ2.9)	—
中2	67.7 (Δ2.8) ( 1.0)	48.1 (Δ1.4) (Δ2.2)	52.6 (Δ6.1) (Δ6.0)	54.1 (Δ2.0) ( 0.4)	60.6 (Δ3.5) (Δ0.5)
中3	—	49.4 (Δ1.7) (Δ2.7)	—	49.0 (Δ1.5) (Δ0.6)	58.8 (Δ1.7) ( 0.8)

( ) 上段：県平均正答率との差。( ) 下段：目標値との差。

Δは浜田市の平均正答率が県平均正答率又は目標値より下回っている。

#### (1) 結果から分かること

・県の平均正答率を超えた学年及び教科は、小3国語、小3算数、小4算数、中1数学の4科目で、昨年の小4算数1教科のみと比較して県平均を超える科目が増加した。特に小3は県平均が目標値を下回っているのに対し、浜田市は算数が目標値を上回っている。

・県の平均正答率より3p以上下回った学年及び教科は、小6社会、中2数学、中2英語の3科目であり、いずれも昨年と比べ落ち込みが目立っている。一方、昨年県平均より3p以上下回った科目は6科目であったのが、それらの科目の県平均との差は縮まっている。(小5算数(Δ3.0p→Δ0.1p)、小5理科(Δ3.0p→Δ1.9p)、中1国語(Δ3.0p→Δ2.5p)、中1社会(Δ3.0p→Δ2.4p)、中1理科(Δ4.3p→Δ2.0p)、中3数学(Δ3.6p→実施なし)の6科目)

・国語は小3を除いて全ての学年で県平均を下回っているものの、小5～中3までの学年で目標値を全て上回っている。社会、理科での目標値は、県とほぼ同様の傾向を示している。

#### (2) 経年比較から分かること

小学校5年：国語は改善傾向にある。算数は昨年度と比べ0.2p県平均を下回った。

小学校6年：理科は改善傾向にある。社会はやや下降気味である。

中学校1年：算数・数学において、小5・小6と学年が進むにつれ県平均との差が縮まっており、中1では県平均を上回っている。国語、社会、理科では目標値に改善がみられる。

中学校2年：全ての教科で県平均を下回っているが、数学を除く国語・社会・理科の3教科は小5又は小6から毎年県平均との差が小さくなり、改善傾向にある。(英語は前年度実施なしのため比較できない)

中学校3年：社会、理科、英語がやや下降気味である。昨年社会と英語が県平均を上回っていたのが、今年はともに1.7p下回った。

### 4 各学年・教科の結果から分かること

学習内容ごとに課題と考えられるものは次の通りである。

(1) 国語

(小学校)

- ・物語文の場面の様子を読み取り。
- ・指定された条件で文章を書く。作文については小3・4で無解答が多かった。
- ・主語と述語の関係、国語辞典の使い方(小4)。

(中学校)

- ・修飾語についての理解(中1)。
- ・指定された条件で文章を書く。作文については無解答が多かった。

(2) 社会

(小学校)

- ・表やグラフなどの資料をもとにした読み取りと考察(面積や人口をまとめた表、日本海側の降水量、日本の川の特徴、遠洋漁業の生産量、日本の輸出、貿易摩擦)。

(中学校)

- ・大日本帝国憲法についての理解、国会についての理解(中1)。
- ・室町時代の政治・経済・社会・文化についての理解、ヒスパニックについての理解、御成敗式目についての理解(中2)。
- ・殖産興業についての理解、大日本帝国憲法について理解(中3)。
- ・図や資料をもとにした読み取りと考察、説明・表現。これらに関する問題の無解答が多い傾向がある。

(3) 算数・数学

(小学校)

- ・数の大小のくらべ方と不等号の意味の理解(小3)。
- ・二等辺三角形の作図(小4)。
- ・四則や( )の混じった式の計算順序、2つの折れ線グラフの読み取り(小5)。

(中学校)

- ・分数の除法の商と除数の大きさの関係、単位量あたりの値を求める式、半径が与えられた円の円周の長さを求める式、線対称な図形の対応する点、比と比例・反比例に関する内容(中1)。
- ・式の計算(分数の乗法、四則計算)、比例の式から、比例のグラフをかく、比例式の文章問題、垂直二等分線の作図、資料の散らばりと代表値に関する内容(中2)。中2は簡単な1次方程式を解く問題について無解答が多かった。

(4) 理科

(小学校)

- ・電気のはたらき、月と星、水のすがたとゆくえ、空気のあたたまり方に関する内容(小5)。
- ・植物の発芽と成長、けんび鏡の使い方、ふりこのきまり、物のとけ方に関する内容(小6)。

(中学校)

- ・いろいろな気体中でのろうそくの火のようす、月の見え方、地層をつくる構成物についての理解、コンデンサー蓄えることのできる電気量(中1)
- ・アンモニアを集める方法、示相化石についての理解(中2)。中2は植物のからだのつくりとはたらきに関する問題の無解答が多かった。
- ・炭酸水素ナトリウムの分解前と分解後の、物質の性質、日本の特徴的な気象と海洋との

関わりについての理解（中3）。中3は電磁誘導、放電の問題について無解答が多かった。

(5) 英語

・対話の内容を聞き取り、資料をもとに英語で答える、語形・語法の理解（一般動詞の過去形、代名詞の目的格の形）、単語の並べかえによる英作文（When で始まる一般動詞の過去の疑問文）（中2）。

・英文の要点を聞き取るリスニング（内容理解）（中3）

・中2・3ともに、資料をもとにしたリスニング、場面に応じて書く英作文、3文以上の英作文の問題について無解答が多かった。

## 5 生活・学習意識調査から分かること

### (1) 授業改善に関わること

・教科の指導について、「先生はわかりやすく説明する。」と感じている児童生徒は全学年で85%以上と高い。

・言語活動についての質問では、普段の授業でグループによる調べ学習や話し合う活動をよく行っている割合は、中学校では1・3年で下回っているものの、ほとんどの学年で県平均を上回っている。中学校ではどの学年も資料を使って発表する活動をよく行っている割合が県平均より下回っている。

・思考・追求についての質問はいずれも学力との相関関係が高く、中学校ではいずれの質問に対しても県平均を下回っている。「別の解き方がないか考えようとする」、「なぜ解けないかを考えようとする」ことなどに課題がみられる。また、小中ともに、問題が解けなくてもあきらめずがんばろうとしている児童生徒の割合が全ての学年で県平均を下回っている。

・「授業のはじめに目標を示すこと」について、中学校ではどの学年も県平均を上回っている。平成25年度全国学力・学習状況調査（以下「H25全国調査」と言う。）と比べ、10p前後の改善（小6 73.1%、中3 62.8%）がみられたものの、H25全国調査（小6 82.5%、中3 67.7%）と比較すると、小中ともに依然として課題である。

・「授業の最後に学習したことを振り返る活動」について、小学校ではどの学年も県平均を上回っている。小6 70.4%、中3 39.8%をH25全国調査（小6 76.7%、中3 51.3%）と比べると小中ともに依然として課題である。

### (2) 読書・学習に関わること

・「1ヶ月に3冊以上本を読む児童生徒」の割合は、小6～中3までは県平均より多い。市、県ともにH25全国調査と比べるとかなり高い。

・「1日あたり30分以上読書する児童生徒」の割合は、県平均と比べると中学校で若干下回っているものの、H25全国調査と比べるとかなり高い。

・小5～中3までは、ほとんどの学年で不読率（1冊も本を読まない率）が県平均より低く、読書活動の普及が感じられる。

### (3) 家庭学習に関わること】

・「普段1日あたり1時間以上勉強する児童生徒」の割合は、全ての学年で昨年より増加している。小5～中3は5p以上の増加であり、中3は17.3p増加している。しかし、県平均と比べると、ほとんどの学年が下回っている。「まったくしない」割合は、小学校では県平均より少ないが、中学校ではすべての学年で県平均より多くなっており、学年が進むにつれて多くなる傾向がある。（中3で8.7%）。家庭学習時間は、市、県ともにH25全国調査を下回ってお

り、小中ともに依然として課題である。

・「学校の宿題をしている児童生徒」の割合は小中ともに高い。「テストで間違えた問題を家で勉強する」割合はH25 全国調査と比べ改善（小6 59.1%、中3 48.2%）がみられたが、約半数の児童生徒は間違えた問題の見直しをしていない。

#### (4) メディアの利用に関わること

・「1日あたり2時間以上テレビやビデオ・DVDを見たりゲームをしたりする児童生徒の割合」は、全学年において40%~60%と高い。県平均と比べると中3以外は全ての学年で高い。小学校が県平均との差が大きい傾向にある。

・「1日あたり2時間以上携帯電話やスマートフォンを使っている児童生徒の割合」は、小学校で7.5%~11.2%、中学校で12.7%~26.2%であり、小中ともにどの学年も県平均より高い。中学校では学年が進むにつれ高くなり、小3、小4でも約10%が2時間以上利用している。

## 6 今後の対応について

### (1) 授業改善について

わかりやすい授業をめざして先生方の努力の跡がうかがえる。児童生徒の思考力・判断力・表現力の育成に相関関係の高い言語活動にも改善が見られる。今後も学校図書館を活用した調べ学習や資料を使った話し合い活動などを通して学習のねらいを達成するための言語活動に取り組み、主体的に学習に取り組む態度を養うことが必要である。

授業のめあてや目標を示したり、授業の最後に学習したことをふり返ったりする活動も改善が見られるが全国値に比べるとまだまだ改善する必要がある。また、テストで間違えた問題の見直しを授業や家庭学習でできるようにする工夫も必要である。

自分の努力がまわりの人から認められていないと思う児童生徒の割合が高いので、それぞれのよさを認めながら問題が解けなくてもあきらめずにがんばろうとする態度を養うことも必要である。

### (2) 家庭学習について

県、市ともに大きな課題でもある家庭学習時間については改善が見られるが、全国値と比べるとまだまだ改善する必要がある。学校の宿題をする児童生徒の割合は高いので、宿題以外の学習習慣を身に付ける必要がある。学習の仕方を定着するために各校で作成されている家庭学習の手引きの有効活用や何のために家庭学習をするのかという学習観をもって家庭学習に取り組む態度を養うことも必要である。

### (3) メディア接触について

メディア接触時間の適正化は、家庭学習時間の確保のために、また、ネットトラブル等の危険性を防止するためにも重要である。中学校の定期テストに合わせて中学校区単位で行われている統一したノーメディアデーの取組をさらに広げていくとともに、専門家と連携して危険性や防止策等についての教員研修や児童生徒、保護者への啓発活動をさらに行う必要がある。このことは家庭学習と同様に、保護者の協力が不可欠である。学級懇談、PTA 総会等の機会を捉えて、メディア接触時間の適正化について保護者に理解・協力していただけるよう説明することが必要である。